

入会 50 年、「変毒為薬」で人生を開く

これからも生涯青春で世界を舞台に！

はじめに

私はこの 8 月 17 日で創価学会に入会して満 50 年となりました。現在 70 歳、「古希」です。60 で定年となりましたが、それから 10 年を経過するなかで予想だにできなかった体験をしてきました。スペイン留学から帰国してまもなくうつになり、人生最悪のどん底に落ち込んだのです。幸いなことに的確な療法、妻の支え、関係者の励まし、それに 40 年余りの信仰の蓄積からその苦境を乗り越えることができました。



このときの、また入信以来の体験から、信心があればどんな難局も切り開いていくことができることを確信しました。そこで、これから長い人生を歩む子供たちにもその信心の確信を伝え、自分の生きてきた道を知っておいてもらうために、信仰体験に沿った「ミニ自分史」をまとめました。

その体験の中で第三者にもお伝えできる部分を要約、結果的にプライバシーもさらけ出すことになる恥ずかしさを忍びホームページに掲載しました。目を通してくださる皆様にも、お役に立てる何かがあれば幸いです。

いつ、なぜ入信したのか

それは都内・大森の創価学会員宅の座談会でのことだった。昭和 36 年(1961 年)の 8 月、一緒に働いていた会社の女性事務員から誘いを受け座談会に出席した。いろんなことが語られていた記憶があるが、今思い出すのは「饅頭(まんじゅう)は食べてみなければ、うまいかまずいかわからない」との結論だった。「だからといって、納得できないものに入ることはできない」。当時ちょうど 20 歳、若い自分にもそのくらいの理性はあった。それでも「うん」と入会に踏み切った背景には次の 3 つがあったからである。

- ① 母が若くして脳溢血で倒れ、半身不随までにはならなかったものの、脳をやられ健常人ではなくなっていた。その母を、なんとか治してあげたいとの強い思いがあったこと。
- ② 母が倒れたことにより大学進学を断念。東京に働きに出てきて以来 2 年半が経っていた。母の病状に変化はないものの落ち着いてきたので、再び進学への思いがつのっていた。「来年は大学受験を考えている」と言うと、「それなら余計に今信心をしたほうがいい」と、先輩会員の強烈な合格体験を聞かされて、その気になりつつあったこと。
- ③ 今思えば、この陰に関係者の強い祈りがあったと思う。また、親戚でもある勤務先の藤

井商会の社長夫妻や数人の従業員がすでに学会に入っていたので、それほどの抵抗感はなかったこと。

入会の手続きと儀式が済むと、御本尊の安置に男子部先輩のS氏が来てくれた。氏は墨田区で税理士をしていた。自分は住み込みで藤井商会ビルの4階の4畳半程の部屋に同僚と2人で寝ていた。時代は東京オリンピック（1964年）を前に、日本の経済は右肩上がりだった。首都東京へは地方から大勢の高卒の若者が働きに出てきていた。会社の仲間たちもみんな地方からの出身だった。

当時の月給は1万円そこそこ。仏壇を買えるようなゆとりはない。先輩のアドバイスで枕もとの壁にワイシャツの箱を画鋏で貼り付け、その中に御本尊を安置した。初めはやはり恥ずかしかった。勤行を始めると、信心していない会社の仲間が冷やかし半分に覗き見にやってきた。

生い立ちから成人まで

ここで入信にいたるまでの自分の人生を総括しておきたい。



母に抱かれた自分と

父の手を肩にした兄

乞食にそれを奪われようとした。助けを求めて叫んでいた光景が今なお鮮明に思い出される。

家の生業は養蚕だった。夏の間、母屋は“お蚕さま”に占領されていたので、家族は土蔵の続きにある小屋の2階で寝起きをしていた。

東箕輪小学校

村立の東箕輪小学校までは子供の足で歩いて30分。学校のすぐ南隣にあったクラス仲間の徒歩数分の家の近さをうらやましく思うこともあった。卒業をするまでに4人の担任の先生にお



終戦後まもないころの村の小学校(左)と、仲のよかった2年のクラス仲間(右)



村の外れにあった生家



世話になった。3年のときの女性担任は4・5年のときの男性担任と結婚した。まだ男女の愛なんてわかる年齢ではなかったが、二人が仲良くやっている姿は子供ながらに嬉しく映ったものだった。

6年生のとき、学芸会で「ドン・キホーテ」を演ずることになった。そのとき自分はドン・キホーテの従者サンチョ・パンサ役となった。なんとそれは、定年後「東京のドン・キホーテ」として“見果てぬ夢”を追い求める遠因となっていった。少年時代の刺激と啓発は、その後の人生に大きく影響していくことをあらためて痛感させられる。

箕輪中学校

やはり村立の中学校は小学校に隣接していた。でも、町村合併により3年次からは徒歩40分の町立箕輪中学校に通うことになった。クラス担任は国語科で情熱的だったM先生。クラスマッチで女子のバレーチームを応援したこと、朝方の冷え込みで寒かった河辺での夏のキャンプも懐かしい。高校を卒業後、東京での仕事の現実と教師への道の夢について悩み、卒業したばかりの高校ではなく中学のM先生に相談の手紙を出した。しばらくして長文の返事が届いた。そこには社会の現実と人生の方向を提示してあり、悩む若者の心を潤す恩師の心温まる手紙だった。



3年次の夏のキャンプへ車を引く

伊那北高校

2年生の初め、予想だにできなかった“事件”が起きた。火災で校舎が焼失してしまったのである。焼け残った体育館と講堂をベニヤ板でそれぞれ6つに仕切った臨時教室ができた。でも、天井もないから隣の教室の声もよく聞こえてくる。よほどの集中力が必要だった。受験に熱心な生徒はできるだけ前の席を取るようしていた。自分の席はいつも前から3列目くらいだった。



その結果、同期生からは7人が東大に入り、早稲田には自分を含め20人余が合格している。この年の進学実績は、伊那北高校の歴史の中でもベストに近いだろう。これこそ校舎焼失をバネに奮起した、仏法でいう「変毒為薬」（毒を変じて薬となす）そのものであろう。

自分にとってもこのときの勉強が、その後の大きな力になっている。英語は2年の実力テストで、早稲田の文学部英文科に行ったM君に続いて全校で2番だった。この時の自信がその後、英語の教員免許を取得し、聖教新聞の特派員として海外に10年駐在し32カ国を訪問、帰国後には横田基地のアメリカ人メンバーの激励にあたり、さらに定年後は基地内のセントラル・テキサス・カレッジで学び、都立高校の英検受験者の指導、さらに英語を土台にスペイン語もできるようになる因となった。

好きだった社会科は、定年後、都立砂川高校で、国際理解のためのインターネット教材「飛行機に乗ったドン・キホーテ」を作ることにつながった。

そして校舎のある高台「薫が丘」の自然環境——東の前方には南アルプス仙丈岳とその左に並ぶ東駒ケ岳のどっしりした偉容。伊那谷の真中を流れ下る天竜川。その西方には中央アルプス西駒ケ岳が、高みを目指し苦難を乗り越えていこうとする自分を作ってくれたと思う。自然が人間を作り、人間が自然に働きかける——創価学会の初代会長牧口先生の「人生地理学」に通ずるような気がする。

それと同期会の存在——特に定年後はいろいろな意味で刺激になり支えとなっている。北士(伊那北の第 11 回卒業生)会のメールによる情報交換、3 ヶ月毎の定例会なども人生充実の良い刺激となっている。

母が倒れ、東京に出て働くことになる

大学受験(京都大学、早稲田大学)に失敗して浪人を覚悟していた 3 月半ば、母が脳溢血で倒れた。ふだんの働きすぎと寝不足が重なり、その日、暑い蚕室で長時間働いていたのが直接の因となったようだ。病状は安静を要し、自分は氷を買ってきては、錐で小さく砕き水枕に入れ看病にあたった。その後、岡谷の病院に入院、父が幾日も付き添っていた。残された田畑は兄弟の 5 人で協力しながら農作業をやってきた。

こんな状況下、進学は断念した。病状がやや落ち着いてきたその夏、東京の叔母からの話で、夫妻が経営する自動車部品の販売会社の事務員として働くことになった。



会社の仲間と逗子海岸へ



神宮外苑野球場での大会で準優勝

株式会社藤井商会。大田区大森にある社員 20 人ほどの小企業。仕事は朝 8 時から夕方 6 時過ぎまで。休みは第 1 と第 3 日曜日のみ。第 2 と第 4 日曜日は半数ずつ出勤となり交代で休みをとった。営業所と同じビルでの住み込みだったので、休日でも車が故障して部品を買いに来る客をアテンドすることもあった。

そんな住み込みの生活の中での楽しみは、夏には京浜急行線に乗って、逗子や葉山の海水浴場に行くこと、また春と秋には神宮外苑の野球場で開かれる小型自動車部品商組合の野球大会に出場することだった。20 チームほど出ていた中で、一度はわが藤井商会チームも準優勝した。なんとそのときは、小柄な自分がピッチャーを務め勝因となったのである。

(上部の写真右: 前列左から 3 人目、準優勝カップを持っている) どのチームも普段は自動車の部品を扱っている素人集団である。スピードこそそれほどなかったが、カーブとコントロールの良さが敵チームの打者を結構抑えることができたのだ。

創価学会に入会する

人生の中で最大の出会い——それはここで御本尊にめぐり合い、創価学会に入会したことである。入社して3年目の夏、事務員のKさんに座談会に誘われた。会場は会社すぐ近くの会員の家だった。(入会から御本尊安置に至る経過は最初に述べた通りである)

初信の功德——それは翌年3月、願いどおり早稲田に合格できたことだった。配点の多い第一商学部の英語の問題に「電話の応答の仕方」が出た。電話にどう応対(日本語で)するか、自分はいつも職場で体験していることだったが、もし高卒の現役で田舎の出身者だったら、当時はまだ電話そのものも少なく通話の体験機会も少なかったので、設問もきっと難しかったに違いないからである。

それと、仕事は経理の大事な部門を任されていたので、そのまま続けなければいけない立場にあった。そこで第二部(夜間部)も受験、第二商学部、第二法学部にも合格していたが、学部の教授に相談すると、当時の昼夜開講制のもと、昼間の籍(第一商学部)のままでも夜の授業も受けられるとの特典を得られたことだった。

しかも、専攻が簿記会計で仕事に関連があることから、入学金、授業料とも会社が全額負担してくれることになったのである。2年目からは社長の指示で、会計帳簿に「研修費」との項目を作り、小切手を切って大学に持っていった。

受験を決意してから10ヵ月、入信してから6ヵ月。ふつう、浪人だったら予備校に通い1日中勉強しているのに対して、昼間は仕事をしながら夜だけの、また日曜日には区立の図書館に通っての勉強だった。難関大学である。高校を卒業してからすでに3年目に入っていた。高校時代の勉強の蓄えがまだ残っていたこともあるかもしれないが、先の三つの結果をみたとき、これは信心による功德という以外にないと思う。

仕事、大学と学会活動

忙しい日々が始まった。朝8時過ぎから4時頃まで仕事。まだ働いている仲間に遠慮をしながらも4時過ぎには仕事を終わり着替え、会社近くのバス停から大森駅へ。京浜東北線に乗り品川で山手線に乗り換え高田馬場へ。そこからバスで大学へ。こうして5時からの授業に駆け込んだ。



商学部では4年間にわたり2カ国語を履修しなければならなかった。選択が夕方以降の授業に限られてくるので、第二外国語の選択の幅はなく、時間的に都合のつくドイツ語を選んだ。こうして3年次以降は英語は「英語商業学」、ドイツ語は「ドイツ語経済学」を学ぶことになった。どちらも専門より語学そのものの勉強になったような気がする。

同じクラスに小児麻痺で右足にハンデのあるI君がいた。彼は卒業と同時に身障者による日本アビリティーズ協会を立ち上げ、さらに身障者を主体にした会社を起こした。自分たちは「保障」よりも「(働く)機会」を求めたい、とのアビリティーズの綱領と、その前

向きな生き方には心から賛同できるものがあり、自分は会社設立時の最初の株主となってサポートした。

授業はふだんは8時に終わった。9時過ぎに会社に戻ると、そこから1日の売り上げほかの会計精算のまとめにあたるのが常だった。

入学してまもなく学生部の班長の任を受けた。そこでときには大学の帰り、そのまま学会活動に直行した。拠点は品川区の第二京浜国道沿いの中延や荏原、そして国鉄大井町駅の近辺だった。活動が終わって会社に戻るのは10時過ぎ。それから仕事に取り組んだ。30分から1時間で終わるものだったが、時には人がもう寝ているような時間になり“なぜこんなに苦勞をしなければいけないのか”と一瞬思ったこともあった。でも今になれば、「これだけでやっているのだから、今後、何があってもできる、耐えていける」との大きな自信をその後の人生に植え付けてくれたことはありがたい。

中村班長の思い出

入信してまもなくの頃、自分をよく激励してくれた先輩の入信にいたる体験にも感動した。男子部の班長だった中村文雄氏。自分より一つ歳上。中卒だったがとても研究心や向学心が強かった。かつて、やくざの組に入っていた。そこから抜け出すには指を詰めなければいけない。脱組するために逃げ回ったあげく、隠れ場所を求めて飛び込んだ家がたまたま学会員宅だった。そこで折伏を受けて入信。以来、結果的に指を詰めることなく、その世界から足を洗うことができたのだという。

元やくざだったが故に、人の面倒見は抜群によかった。氏がハンドルを握るバイクの荷台に乗せられてメンバーの家庭訪問に行ったものだった。おじいさん、おばあさん、壮年、婦人にも人気があり、話がうまく、情熱的で人間味があった。自分の現在あるのも、氏からの激励が大きな因となっていると心から感謝している。

NHK学園高校の教師として

大学4年になると生協食堂近くの掲示板に貼られた求人広告が目についた。「早稲田の第一商学部卒」との学歴は就職には有利であったと思う。でも、さすがに藤井商会にお世話になりながら、卒業と同時の転職ははばかられた。かといってなんとか次の道も開きたい。そんなことを思っていた12月、東京都の私立高校の教員採用資格試験があった。ともかく、できることはやっておこうと受験しておいたことが、幸運にも次の道を開いてくれたのである。



合宿スクーリングの生徒たちと

翌年1月、NHK学園高校から採用のための面接案内が届いた。12月の資格試験の受験者リストから選んだようだ。学校はJR中央線の国立駅から歩いて20分。当時、学校の周囲はまだ畑に囲まれていた。商業科では8人ほど応募したが自分を含め2人が採用された。早稲田卒という学歴と現場での会計実践が評価されたのかもしれない。NHK学園

が開校して3年目、3年次に出てくる職業科目（商業簿記）の教員募集というタイミングに合ったのだった。学校全体では15人あまりが新任教師として採用された。藤井商会の社長も希望をわかってくれ、円満退社できたのも嬉しかった。

職場は当時としてはモダンな3階建て校舎の2階の職員室。校長は元文部大臣でもあった森戸辰夫、副校長は元都立第五商業高校校長だった。

仕事は午前中がリポートの添削、午後は試験問題の作成や教材の準備、各種の会議だった。それに本校でのスクーリング担当。そのほか年に2～3回、地方の合宿スクーリングへの出張があった。

ソ連旅行が縁で学会本部の職員に

NHK学園に入って3年目の6月、新しく取得した社会科免許の申請のために早稲田大学に行った際、たまたま「ソ連ハイライト旅行」なる企画が目にとまった。免許を取得したばかりだったので、ちょうど地理や歴史の実施研修によいと考えた自分はすぐに申し込んだ（この思い切りの良さは、その後の海外旅行や定年留学にもつながっている。グズの自分のどこにそんな決断力があったのかと思われるのだが・・・）。

今でこそロシアは近くなったが、当時のソ連はまだ“鉄のカーテン”が国を覆っているような状況だった。費用は2週間で24万円ほどだった。

このときの旅行の印象を記録風にまとめ、大学時代の同級生I君に報告した。身障者仲間で印刷業を始めていた彼はそれを小冊子にしてくれた。そして実は、その小冊子が契機となって聖教新聞への転職となったのだった。

旅行のため2週間あまり男子部の活動も留守にしていたので、帰国報告の意味も兼ねてF先輩にこの小冊子を届けておいた。と、翌年の1月、聖教新聞に勤務している同氏から「記事を書くのが好きだったら聖教の記者になってみないか」との誘いがかかってきたのである。入会してから少しずつ自分の使命に目覚め、広宣



モスクワ大学の前で

流布のために何かできることはしなければと考えていたので、私は言われるままに学会の本部に行った。そこでは筆記試験と面接試験があり、このとき10人近くが採用された。

さっそく4月から勤務との辞令をもらった（お世話になったNHK学園高校から急に抜けるのは申し訳ないとも思ったが、たまたま学期の変わり目でなんとか補充がつく段取りになったのはありがたかった）。

それにしても――。人生の大転換であった。仕事と生活はまさに“出家”に近い状態に変わったのだから。しかも前年の12月には婚約したばかりで、4月には結婚という段階にあった。たぶん、妻の両親は自分が学校の先生という経済的にも比較的安定した職業にあったことから、安心して結婚を許したに違いない。彼女の父親は草創期の地区部長を経験し、一応、本部職員の生活（時間的には多忙で、経済的にもつつましくしないとやっていけない）についてもわかってはいたようだが、それでも、である。でも、そこから更に大き

な人生が展開されていくことになったのである。

聖教入社と同時に結婚の異例

このころ、並行するかののように、幸運にも先に申し込んであった都営住宅の空き家抽選が当たった。小平市内の 3 箇所の住宅を紹介され、国分寺駅に近い上水本町に決めた。勤務先のNHK学園にぐっと近くなる、との思惑もあったからである。

ところが——。なんと人生のあやの不可思議なことか！大森から小平への引越しの準備をしていたその日に、先に述べたF先輩から電話があり、結果的に聖教新聞で働くことになったのである。中央線の国分寺から国立へと、通勤にぐっと近くなるはずが今度は国分寺から信濃町へとぐっと遠くなったのである。

4月初め、聖教新聞の編集局に入るとまったく別世界の生活が展開していった。すぐに研修が始まった最中の4月27日が結婚式だった。蒲田の日蓮正宗宝浄寺で式を挙げ、披露宴は大井町の結婚式場。入社早々ということで、職場の聖教新聞からの参列は代表の1人のみ。それに両家の親族と自分たち2人の学会の同志、友人と合わせて計40人前後の質素な披露宴だった。(100人余りを招待して、キャンドルサービスや各種企画のある現在のホテルでの結婚式と比べたら本当に質素だったと思う)

入社してその月に結婚などというのは、以前から決まっていたという特殊事情だけに認めてくれはしたものの、本部職員の歴史でも前代未聞のことであった。

悪戦苦闘、深夜帰宅の駆け出し時代



箱根へ1泊の新婚旅行から帰ると、翌日から連日、深夜の帰宅となった。土曜日・日曜日もなかった。原稿の書き方もわからず、よい原稿が書けず、見出しも決まらず、よいプランも生み出せず、時には空回りをしているような状態で時間だけが過ぎていった。

仮に体調が優れないときでも、「戸板に乗ってでも出てこい！君が病気だからといって、君の担当の紙面を白紙のまま出すわけにはいかないだろう」と、新聞の紙面を担う精神を先輩からたたきこまれた。

「原稿にデスクが筆を入れ始めてくれたらしめたもの」「手の入れ

箱根で ようもない原稿だと、鬼のデスクは破り捨てるかタバコの火をつけて燃やしてしまう」といった、屈辱感から発奮させられる新米記者のあり方なども、編集関係の本で読み、身につまされた。

それでも入社3年目くらいになると少しはよい原稿も書け、新しい企画も提案できるようになった。そのなかで自分が企画した記憶に残る記事は「生涯学習へのステップ」との5回の連載企画だった。なぜか？実はこの「生涯学習」という言葉は聖教の紙面史上では初めて使われたからである。

「生涯教育」との言葉は当時かなり使われていたが、「生涯学習」はまだ一般紙でもその

使用が見られなかった。だから自分の“造語”であってはいけないという心配もあった。でもやがてこの言葉が定着してくると、それは逆に誇りともなっていた。(定年後、まさに自分がその生き方をしているのは感慨深い)

英語とスペイン語への取り組み

途中から、英語ができるということで、海外関係の記事を担当するようになった。やがて海外組織の発展に伴い、編集局内に外信部が誕生した。部員は4人。そこで大陸別の担当を決めることになった。他の3人は東京外国語大学などそれぞれ英語の専門大学を出ていた。自分の専攻は簿記・会計で、英語もある程度は操ることはできたが3人には及ばなかった。そこで自分は英語が最も使われない中南米を担当することにしたのである。



アメリカ人メンバーと

とはいえ、ブラジル(ポルトガル語)を除き、ほぼすべての国がスペイン語である中南米関係の紙面を作るのには、どうしてもスペイン語の理解が必要だった。また、できなければ中南米担当として申し訳ないとの思いもあった。そこで独力で勉強を始めた。スペイン語は発音が日本的で、話すのには日本人向きだが、文法が複雑でややこしい。とりわけ動詞の活用が難しい。

このころ、信濃町駅近くの日本スペイン協会でスペイン語のクラスのあることを知った。職場からも歩いて5分。夜は男子部としての活動もある。編集記者というのは、締め切り日までに担当の原稿を出すことができさえすれば、時間的には比較的自由である。そこで勤務時間中にクラスを受けたいが、と報告書を書き上司に申し出た。その報告書は結果的にトップまで回り、なんと次のようなコメントと共に戻ってきた。

「面白い職員がいる。世界広布が進み、将来、聖教でもスペイン語ができる人も必要になるだろうから、しっかり勉強させなさい」

この結果、75年の夏ころから週2回、1日2時間、このスペイン語クラスに通うようになったのである。逆説的のようだが、英語が完璧にできなかったのが幸いして、結果的にはスペイン語もできるようになった。自分の場合、恵まれた特殊なケースだったかもしれないが、志ある若い人には是非この心意気と体験を伝えたいと思う。

そして、これも一つの因となって(他にもいろんな要素があったと思うが)、76年、中南米をカバーする特派員として派遣されることになったのである。聖教に入社して7年目のことだった。また幸いだったのは、入社1年目に先生から「君たちの今後の人生で何か困ったことがあったら、まず、100万遍の題目に挑戦してみなさい。どんな悩みや苦難も必ず乗り越えていくことができるよ」との指導を聞くことができたことである。以来、昼の休憩時間を含めて1日3000遍以上は心がけてきた。唱題表もつけてきたが、毎年100万遍は超えていた。この題目の積み重ねが、その後の人生のすべてを切り開く源泉になってきたと、つくづく実感している。

特派員生活の10年 (1976年7月から1985年12月まで=個人的な記述も多いので載せていませんが、別冊「パナマ回想録」に詳しく述べています。ここでは写真のみ紹介)



写真： 上から左→右へ 「本社から訪れた特派員とセスナ機で運河上空を飛ぶ」 「パナマ運河の太平洋側のロック」 「パナマ・メンバーによる文化祭」 「パナマのテレビ番組に出演」 「ペルーのマチユピチュへ登る」 「メキシコ・ユカタン半島の遺跡で」 「ブラジル・リオデジャネイロの展望台で」

つつじが丘支部の支部長に

パナマから帰国してから1年間は国分寺に借家住まいをしていたが、87年に昭島つつじが丘の公団住宅を購入し引っ越した。半年後には、この団地とその東側に広がる地域の支部長に任ぜられた。支部の協議会は我が家で、活動者会は婦人部長宅で。入居が始まってまだ数年と団地自体が新しかったこともあって、メンバーも活動内容も新鮮だった。4年間の在任期間に多彩な催しもできた。支部歌を作って立川文化会館で発表会をしたり、市民会館の小ホールを使っての文化交流の集い等々。

「あのころ<清水支部長の時代>は本当によかった。楽しかった」とその後、当時を懐かしむ声を何回も聞いた。でも、時代は流れているし、次の人材にバトンタッチしていくことも大切だし・・・。

帰国して再び外信部に

1985年末にパナマから帰国すると、翌年から再び外信部で働くようになった。一時はSGI(創価学会インタナショナル)の中米担当にこの話もあったが、原稿を書くことに精魂を注いできた自分にとって、聖教での仕事はありがたかった。スペイン語、それに英語を駆使しての取材活動はやりがいもあった。

訪日した海外メンバーの取材、「サンデー・インタビュー」、「てい談」等で内外の著名外国人へのインタビュー取材も多々あった。とりわけ記憶に残るものは：

- ① フォークランド戦争(アルゼンチンでは「マルビーナス戦争」と呼ぶ)からほぼ1年後に、研修会で来日したイギリスとアルゼンチンのメンバー4人の座談会を企画したこと。出席者は「21世紀のマーチ」を作詞・作曲したイギリスのヒュー・バーンズ氏やアルゼンチンのピアノ教師など。この司会を自分が英語とスペイン語を使いながら進行的こと。「肩組み歌えば心は一つ」とのタイトルと記事は読者の胸を打ったと思う。
- ② フランスの小学校校長、インドの大学教授、メキシコの中学校女性副校長の3人による鼎(てい)談を、フランス語と英語、スペイン語と英語のできる通訳をおきながら、自分がすべて英語で進めていったこと。(これを日本語の通訳を入れてやったら、ものすごく複雑になり時間もかかったであろう。ほとんど不可能に近い)
- ③ アメリカとオーストラリアの青年部メンバーの座談会の司会をすべて英語で進行、通訳がそれを日本語に訳し、その隣で記者が筆記しすぐに原稿を書き上げたこと。

(これらについては「私の語学習得体験」で詳しく語っています)

他の企画記事の紙面でも出色なものも多く、一時は編集朝礼で毎週くらいに「賞」を受賞した。仲間から冗談まじりに「賞取り記者」なんて言われたことは、自慢めいた話になってしまうが、それだけ聖教紙面の向上に貢献できた実証として、素直に嬉しく思っている。

秋谷会長のヨーロッパ訪問に同行取材

7年ぶりに再びパナマへ

コロンビア、メキシコ、キューバへと

(これらの詳細も「パナマ回想録：パートⅡ」で触れています)

聖教新聞から本部国際室へ

1998年10月の人事で本部の国際室へと異動となった。背景は特派員が海外駐在員として聖教新聞から学会本部の管轄下に入ることになり、その掌握・連絡・支援を総務部長としてやっていくことになった。さらに国際室には多くのスタッフがいたが、その中にはかなりの数の外国人メンバーもいて、その掌握・支援も業務の一環となっていた。海外駐在員については、自らの10年間の駐在体験が生きて、お互いにやりやすかったと思う。留守家族の慰問も自分でなければ出てこない発想だったと思う。

私事にはなるが（でもとても大事なことだ！）、国際室で適齢期にあった美しい女子職員2人を、聖教の有能記者に紹介し縁結びに貢献できたのも、二つの職場に通じた自分だからとも言える。

サンタメリカの支部長に、定年後は基地内の大学へ

つつじが丘の支部長を降りてまもなく、横田基地の中にあるアメリカ人メンバーの組織・サンタメリカ支部の支部長に任命となった。昭島市が基地のある福生市の隣で近いこと、自分がなんとか英語を操れるから、との事情があった。基地に入ってみると、支部の活動やメンバーは日本とは大きな違いがあった。きわめて自由な雰囲気があること、底抜けに明るく元気があること、誰でもがよく発言すること等々。

支部長在任の後半には、小児科医でもあるS少佐が地区部長となりO地区担と共にサンタメリカの次への大きな道を開いてくれた。サンタメリカ支部を仏教団体として基地の宗教局に登録したのである。

その結果：

- ① キリスト教やユダヤ教と同じように、チャペルを信仰活動に使えるようになった。
- ② 基地内のラジオや新聞に活動の案内等をのせられるようになった。
- ③ 基地外での行事の際、軍のバスが提供される。ガソリン代も高速料金も負担される。
- ④ 図書館や病院など基地の中の公共施設に仏教やSGI(創価学会インタナショナル)紹介の本やパンフを置ける。
- ⑤ 他の基地からメンバーが移入してきた際には中心者に連絡をくれる。

などの特典が与えられたのである。

宗教を大切にし、平等を尊重するアメリカ社会の一つの姿である。実際に、我々もチャペルで会合をし、バスで本部訪問や富士美術館の見学をし、セミナーの知らせをラジオで流し、図書館に仏教関係の書物を置いたり、これらの特典を運用できたのはすばらしかっ

た。箱根や氷川での野外研修会や基地の中でのピクニック（バーベキュー大会）も懐かしい。

ところで、基地内に入るのにはゲートで係官を通しメンバーに電話をし、承諾を得てからであった。そのつど、1枚の許可証が発行された。毎回、メンバーにはお世話になった。ところが定年になり時間ができると、私は基地の中の大学に通うことを思いついた。メンバーにより役立てるために英語のレベルアップと、アメリカ人を理解するための文化比較の勉強がしたかったからだった。

基地内にはメリーランド大学とテキサス・セントラル・カレッジ(CTC)の二つの大学があったが、メリーランドは TOEFL がコンピュータテストで 213 点（ペーパーテストで 550 点）を要求された。自分は 207 点でわずかに届かなかった。CTC の方は最低が 170 点ほどだったのでこちらには問題はなく入ることができた。大学での勉強とともに、自分のパス（入基地許可証）が発行されたのはありがたかった。

定年留学

（マラガ大学での学生生活、コスタ・デル・ソルでの生活、スペイン各地の訪問レポート等を『定年留学』してみませんか？——60 歳からのアクティブ・ライフのすゝめ——）（文芸社刊）に執筆、このホームページでも紹介しています）

本の中では触れていない、留学にあたってもう一つの目的はスペインのメンバーに貢献する、ということだった。妻と私はスペインの地中海岸コスタ・デル・ソルのトレモリーノスのアパートに住み、自分は毎日マラガ大学に通っていた。当時、マラガの SGI メンバーは 5 人にも満たなかったが、アルゼンチンからやってきたマルセラ夫妻とベロニカ夫妻の頑張りで次第に会合に集うメンバーが増えていった。私たちはこの座談会や唱題会に参加しては激励を重ねてきた。



マラガ大学のクラス仲間と



我家(賃貸マンション)での座談会

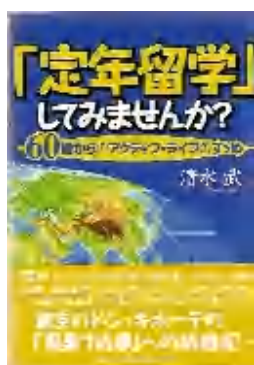
さらに私個人は、東のネルハや隣の州のアルムニェカルまで御書の勉強会や座談会の応援にも行った。バスで片道 2 時間の旅だった。そこではイギリス人のエリザベス夫妻やイタリア人の弁護士夫妻などとも親しくなった。それにしても、こんな異郷でも日蓮大聖人の仏法を学び、人生の師匠を求め、活動に励むメンバーがいることが不思議でもあり、感動的でもあった。まさに“地湧の菩薩”そのものだった。

9月、セビリアでの南方面（アンダルシア）の総会にもマラガから10人あまりが参加した。カプート理事長も来てその模様は聖教紙面にも写真入で紹介された。マラガはもう班を超えて地区の実態があった。我々の帰国後まもなく地区が結成された。スペイン行きの目標の一つは達成されたのだった。

ところで、ビザは2003年の8月までであったが、出国後1年が過ぎると海外での傷害保険が切れる。本の出版を進めること、子供たちの結婚のこと、お金のこと等の状況の変化に合わせ、ちょうど1年のスペイン滞在で帰国することになった。2003年4月24日、成田に帰着した。

本の出版に踏み切る

私はスペインでの生活を毎日記録に残していた。まさにパソコンの便利さである。少しまとまってくると、「これは是非とも本に」との思いが募ってきた。そこでスペインにいる間に出版社と連携を取りながら、帰国するとすぐにその出版準備に取りかかった。わが人生のなかでも最も充実した1年だったスペイン留学。その素晴らしさを同じシニアの人たちにも伝え、勧めたかったからだった。



タイトル「『定年留学』してみませんか？——60歳からのアクティブライフのすゝめ——」。版元は自費出版では大手の文芸社。出版日付は自分の入信記念日の8月17日にした。

こうしたなか、中学の同級生K君の勧めで、9月には郷里の箕輪町文化会館で、本の出版を記念して講演会が開催された。これには平沢町長も出席してコメントをいただいた。兄弟のほとんども集ってくれた。途中でギター演奏も披露しながらの楽しい集いだったと思う。本はその年の暮れまでに2刷り1500部くらいまで売れたが、その後は伸び悩んでいた。

うつになり一時はどん底に

こうしたなか、出版が一段落したらまた何かの仕事をしなければ、と考えいくつかの仕事を探していた。だが、立川のハローワークに行くも、60歳を超えたシニアへの仕事はほとんどなく、あるのはマンションや駐車場の管理と清掃作業くらいだった。そこで、かつての自分の人脈から、創大のT教授、NHK学園のK先生、アビリティーズのI社長にもお願いしておいた。

そんな矢先、10月ころから自分に変調が進んでいたようだった。何に対しても自信がなく、決断力に欠け、夜もよく眠れなくなった。生きていること自体がつらくなり、時に自殺の考えさえ浮かぶようなこともあった。いわゆる、うつの症状だった。

原因はわからなかった。自由でのびのびとしていたスペインから忙しい日本に戻った環境の変化からか、子供の結婚問題等いろいろな心労が重なった故からか、あるいは自分が人

一倍まじめで心配性である性格からきたものなのか・・・。

そして、なんというめぐり合わせなのだろうか！その体調が最悪だった翌年の初め、前年の夏から秋にかけて頼んでおいた仕事のオファーが重なるように続いたのである。

一つは、創価大学の通信教育部の英会話講師。一つはNHK学園高校の添削講師。一つは昭島駅北口の「昭和の森カルチャーセンター」のスペイン語講師。さらに、前年の秋にお願いしておいた日本アビリティーズ社での仕事が、伊東社長との何回ものメールのやりとりの結果（氏も自分の処遇に悩んでいたと思う）、「社長室参与で」との話も受けていた。これらの素晴らしい4つもの仕事のオファーも、体調の悪さを理由にすべて断ってしまったのである。もう未来に何の希望も見出せなくなっていた。

2004年の2月から3月初めのころはどん底だった。昭島市内の神経科に通い、何回かは都内の高名な専門医も訪ねた。またドクター部員でもある高田馬場の於保クリニックも訪れた。結論としては、くよくよするな、心配するな、あるがままの自分になれ、との診断・指導だった。いやなことはやめ、自分の好きなことをしていく、これがうつにならないための処方箋であった。

そのころ自分の症状を知った何人かの幹部も自宅を訪ねてくれた。その中でもS区長の「清水さんが元気でいてくれるだけで嬉しい」との言葉が、自分の気持ちをずいぶん楽にしてくれ、また励みにもなった。（激励の仕方が本当に大事だと今思う！）

こうしたなか、創価大学から教職員としての入学式の招待状が届いた。英会話の講師をお断りしてはいたが、その手続きが間に合わず送られたのだろう。4月1日。創立者の池田先生も出席される予定だったことから、何かの転機にしたい、との思いで意を決して参加した。座席は壇上横の幕間裏だったので緊張もなく話が聞けた。先生の話はユーモアがあって心が和んだ。この入学式参加を契機に（ちょうど薬の効果が出てくる時期とかみあって）、自分の病状は大きく回復していったのだった。

すべてを変毒為薬して

どれをとっても素晴らしい4つもの仕事を断ってしまった後は、未来に絶望的な思いを抱いていた。朝起きると、何をすることも長い1日が始まる。夜になるとまた暗い長い夜が始まる、と悶々とした心だった。今さら「体調もよくなってきたのでまたお願いします」なんて言えない。実際に、昭和の森カルチャーセンターに行ったが、すでに別のスペイン語講師が決まっており、また突然のキャンセルで信用も落としていて断られてしまった。また、NHK学園の方も仲介のK先生に頼んでみたが「もう勘弁してくれ」とこちらでも断られた。

再び新聞を取るようになって（どん底だった3ヵ月間ほどは、新聞もテレビも見たくなく断っていた＝これがうつの症状の一部）日曜日に入ってくる折り込み広告を丹念に読むようになった。60歳を過ぎた壮年の募集はほとんどなかった。あるのはマンションの管理人、駐車場やビルの管理、清掃作業人等だった。一時は仕事さえあれば、駅のトイレ掃除で

も、とまで思うこともあった。

こうしたなか、4月に昭島市のシルバー人材センターの入会受付と面接があり（2月にもあったが、決断がつかないまま時間に遅れくこれも症状＞行かれずにいた）自転車管理の部門に入った。

まず、自転車整理の仕事から

6月から仕事が始まった。家から自転車で5分のJR青梅線昭島駅南口の立体駐輪場。仕事仲間は10人。全員が自分より年上だった。朝6時、駐輪場の掃除をしながら、これまでの自分の経歴や資格を思い出し、“自分のようなく能力のある＞者がこんなことをしていていいのかなあ”なんて思いもときおり生じてきた（この思いはその後、次第に変わっていく・・・）。仕事は単純で、勤務も週3日か4日、1日4～5時間だったので、やはりもう少し何かしなくては、と立川のハローワークに行ってみた。



都立高校の教材作成と英検の指導

すると、偶然にも人材派遣会社が募集する都立高校のティーチング・アシスタントとの仕事が目についた。東京都の緊急雇用対策の一環で今年度のみの適用という。ラッキーだった。面接があり合格。すぐに都立砂川高校の社会科の教材作成の仕事を紹介された。

学校に行き、担当教諭と話をしているなかで、自分の海外体験を含めた、国際理解のための社会科のインターネット教材を作ってほしい、ということになった。そこで学校に行ってはパソコンの前に座り、以前に出版した『『定年留学』してみませんか？』と「ラテン・アメリカに暮らして」を参考にしながらの教材づくりにあたった。これまでの経験が生きたのはありがたかった。教材は翌年（2005年）6月からネットに載った。

続いて、英検の受験者の指導を、ということで都立日野高校と砂川高校に通った。2級、準2級、3級と、どちらの学校も10人～20人の受験者だったが、筆記試験に向けての学習、面接試験の模範演習とやり応えのある楽しい仕事だった。結果的に、どちらの学校も自分が担当した生徒は全員合格した。両校の担当教師からお礼のメールも届いた。

振り返ってみるに、商業科を教えていたNHK学園高校時代に社会科の免許を、聖教新聞時代に英語の免許を取得してあったのが30年後に生きてきたのである。

シニアクラブ役員、市民大学、TMC

体調がよくなってくると、さまざまな部門にかかわっていくようになった。居住する団地のシニアクラブ(老人会)の役員を頼まれ引き受けた。そこから結果的にパソコンサークルの立ち上げをし、「らくらくパソコンサークル」と名前をつけ、自分が初代の会長を引き受け、さらには機関紙「ゆずりは」の編集も引き受けることになった。ここでも聖教時代の

経験が生かされることになった。

昭島市の市民大学にも登録した。また体調が悪くて一度はボランティア通訳を断ったTMC（たちかわ多文化共生センター）にも入会、月1回の外国人相談の担当にもつくことになった。05年末には「在日外国人をどう受け入れ共生していくか」とのフォーラムでパネリストも務めた。フォーラムの内容がよかったので聖教新聞の「名字の言」で紹介すると、TMCの理事長がその掲載紙のコピーを運営会議のメンバーに配ったとのことだった。

テニスクラブ、男の料理教室、稲門会

健康管理のために、所属しているテニスクラブ（「レインボー」）にも積極的に出るように



した。また、市の福祉センター「あいぼっく」で月1回開催されている男の料理教室「食楽会」にも参加するようになった。定年直後、スペイン留学前にクッキングスクールに1年間通ったことが生き、わが家の料理にも役立つ有益な教室になっている。

今は100を超えるレシピも たまたま昭島駅隣りの中神駅の駐輪場には、早稲田の校友会組織・昭島稲門会の代表幹事がいて、自分も同会に入会した。氏はシルバー人材センターの広報部会長でもあった。その氏からの依頼で、駐輪場に入って早々、同センターの機関紙「いずみ」にエッセイを書くことになった。「ピッカピカの自転車整理一年生」とのタイトル。ユーモアある面白い内容だったと思う。

日経マスターズの通信員に

あるとき、高校の同期であるM君の定年後の生き方＜NHKのアナウンサーを退職した後、森林インストラクターとして活躍している＞を紹介している雑誌「日経マスターズ」に目を通した際、そこで通信員を募集していた。さっそく応募するとOKとなった。長野で開催されたスペシャルオリンピックスのレポートなど、寄稿は何回も掲載された（現在、雑誌は別称となり、寄稿も少なくなっている）。

日本ペンクラブの会員にも

スペイン留学の本の出版の直後、聖教新聞の先輩でもあり、隣の立川市に住むM氏から話が出て、自分も日本ペンクラブに入会を申し出ることになった。会員のK氏と理事のS氏に推薦人となっていただき、幸いにもメンバーになることができた。国内の著名作家を初め自分のような無名の文筆家を含め会員数約2000人。日本をリードする知性集団の一つである。

PENはPoem, Essay, Novelの頭文字をとったもの。偶然にも、ものを書くペンと合致しているのも面白い。

入会には結構高いレベルの条件があり、簡単には誰もがなれない世界である。世界文学

紀行を定年後のライフワークにしている自分にとっては、いろんな可能性が広がっていきありがたい。それなのに体調が悪いときは「自分はもう筆を折るんだ！」と思い込み、一時は脱会までも考えるようになっていた。でも、結果的にそこまで至らなくて本当によかった、と今思う。

SGIで仕事を始める

砂川高校での英検の指導と社会科の教材づくりが終わって一段落したころ、SGI(創価学会インタナショナル)事務局から、国際交流部で仕事ができないかとの問い合わせがあった。土日を含めて週2日の出勤ということだった。これは週3日から4日の駐輪場の勤務スケジュールからすればピタリだった。しかも、かつての海外体験と英語・スペイン語も生かされてくる。さっそく、2005年5月から勤務が始まった。仕事は電話の応答のほか、海外から来日したメンバーのアテンドと指導、海外に出て行く日本人メンバーの紹介状づくりとアドバイスや激励である。

しばらく現場で働いている間に、来館者の中に海外に留学する学生が多いことに気がついた。そこで再び発心、「海外留学アドバイザー」の資格試験に臨んだ。受験会場はなんと東大の本郷キャンパスの教室。結構ぶ厚い教材を購入し、事前にそのための講座も受講した。結果はこの年にして幸いにも合格だった。

動機は“どうしたら今いるところでより貢献できるか”との思いが原点だった。聖教のパナマ特派員として派遣される因ともなった自発的なスペイン語の勉強、またサンタメリカ支部長時代にアメリカ人メンバーに少しでも役立てるためにと、大学に入り英語のブラッシュアップに励んだのと同じである。これは創価学会メンバーとして、また社会人としても前向きに生きる大事な人生の姿勢だと思う。

語学と海外体験、信心と人生経験を生かしながらのSGIでの仕事はまさに自分にピタリだった。しかも、来訪者や電話がない間は時間的にゆとりもあるので、パソコンで業務用の資料作成のほか、英語、スペイン語の翻訳作業などできるのも、両言語をさびつけさせず、また少しでもレベルアップさせることができありがたいと思っている。

ホームページを開設

都立高校の教材づくりが終わると、せっかくできた教材「飛行機に乗ったドン・キホーテ」を自分のホームページにも載せたい、と思うようになった。幸いに砂川高校でも転載を承諾してくれた。そこで団地内に住むパソコンの先生に手伝ってもらい、この機会にこれまで書いてきた随筆やリポートも載せ、英語とスペイン語のページも作った。現在までに本にして10冊分以上の内容が入ったホームページができている。(2011年8月17日現在アクセス数16000)

世界を一瞬に結び、現代文明の歴史さえも変えつつあるインターネットを最大限に活用していくことがこれからは大事だと思う。自らの思いもネットから発信できる。今ご覧い

ただいているこの私の信仰体験も、ネットのおかげで皆さまの手もとに届けることができているのです。

再び「ドン・キホーテ」の舞台を訪ねる

2005年10月には聖教写真局を定年退職したばかりの立川のI氏と、出版400周年の「ドン・キホーテ」の舞台を回った。たまたま1ヵ月前、SGIを訪れたスペインメンバーSさんと懇談している際に言われた。

「それなら、私の住む町アルカラ・デ・エナーレスに来なくっちゃ。作者セルバンテスの生家があり、いろんな記念行事が行われているワ」

偶然とはいえ、本当にラッキーな出会いだった。その結果、アルカラ・デ・エナーレス、マドリード、ラ・マンチャ、グラナダ、マラガ、マルベジャ、トレモリーノスを訪れたのだった。

紀行は郷里の信濃毎日新聞の夕刊に5回にわたって連載となった。背景には、その年の2月、長野県で開催された、身障者のスペシャルオリンピックにボランティア通訳として参加していたことを評価してくれたこともあったようだ。



ラ・マンチャの風車

陰徳あれば陽報あり。なんでもできることは貢献しておくことが大事なのだ。

この後も短かな記事が月刊誌「潮」や「パンプキン」にも掲載された。しかもその後、現地のメンバーがパイプとなって、セルバンテスの生地アルカラ・デ・エナーレスの新聞社「Diario Alcala」からメールインタビューがあり、現地でタブロイド版1ページの紙面となった。予期しなかった輪が広がっていった。

ホームステイ受け入れとFM多摩への出演

その年の12月にはフルブライト奨学金の団体の交流で、昭島市が受け入れたアメリカの小学校教師のホームステイを引き受けた。インディアナ州のホリー・マーシャルさん。1泊2日の滞在。食事の提供からいろいろとお世話しましたが、こちらもさまざまな刺激を受ける楽しい出会いだった。

翌06年の正月明けの5日にはFM多摩のラジオインタビューを受けた。「定年留学とシニアが元気になる話を」ということで、10分間だけだったが思っていることを存分に話させてもらった。

「変毒為薬」とはこういうことだったのだ！

仏法で「変毒為薬」(毒を変じて薬と為す)との言葉があるが、今思うに、ちょうど7年半前のうっで苦しんだ最悪期を乗り越えた結果、素晴らしい変毒為薬の道を歩むことができたのだと思う。その意味では、有望と思われた4つの仕事だめになって却ってよかったかもしれない。

創価大学の英会話講師の仕事も、NOVA（当時）を初め街中にこんなにもある語学学校のネイティブ講師には、とうてい太刀打ちできなかったであろうこと。いくらがんばってもネイティブと日本人とでは、もともと越えられない壁があり、その結果、自分も落ち込んでいく可能性もあったかもしれない。

NHK学園の添削講師の場合は、新たに「ビジネス初歩」の勉強をしなければならなかった。簿記に加え新しい教科の勉強。机にへばりつく仕事で運動不足になったかもしれない。

昭和の森カルチャースクールのスペイン語講師も、少ない講師料に対し、相当の準備を強いられたであろうこと。またシルバーで働いている駐輪場の職場があまりに近く、仕事仲間との関係が心配されたかもしれない。

千人近い社員がいるアビリティーズ社の社長室参与（社長は大学時代の友人I氏）という肩書きも、囑託とはいえ、責任がずっしり肩にのしかかり、事情もわからないことを一から勉強しなければならず、とてもついていけなかった、であろうこと。もし行けば再びノイローゼになりかねなかったかもしれない。

駐輪場から始まった仕事は、それなりに意味があり、病み上がりの自分にとっては最適と思われた。まず、生活のリズムづくりと運動になっていた。5時起床、6時出勤の早番は少々きついが午後が自由になり、1日を2日分に使えるような気分さえなる。体を動かすと同時に、利用者に大きな声で挨拶をすることが健康によいこと。社会の最前線と接触していること。明るい女子高生などから若さをもらうこと。そしてこの間、体を動かすだけで頭脳をあまり使わなくてよいことが、その後、家で原稿を書いたりパソコンに向かうことに集中するのに有用なこと等々。

S G Iでの仕事にはこれまでの経験のすべてが反映されている。パナマ特派員、S G I 中米指導長時代の体験。サンタメリカ支部長時代の活動とテキサス・セントラル・カレッジでの勉強。マラガ大学への留学体験と海外留学アドバイザーの資格。それに50年間の信心体験と70年の人生経験でもある。

N P O法人のたちかわ多文化共生センターのボランティア活動（在日外国人の相談室担当）では、英語やスペイン語の翻訳作業もときどきする。そのネイティブチェックは、夜、メールでアメリカやパナマの友人に送っておくと、翌朝にはもうチェックされたものが戻っている。時差の関係でこちらが眠っている間に仕事は進んでいるのである。

（この面白い“仕組み”は「気まま随想」2007年の4月分に詳しく出ています）。

まさに地球を舞台にした活動ができるなんて本当に素晴らしい。外国語の活用と共に、在日外国人の支援のためにも、これまでのあらゆる海外体験が生きているのは本当に嬉しいことだ。日経マスターズの通信員は、雑誌そのものの廃刊で3年で終わったが、聖教の記者時代の経験が生き、記事のほかにはときには企画の提案までもした。極少だけれども原稿料（図書券）も送ってくれた。

昭島市民大学も2年間のクラスの後、3年次は公開講座を進めることになり、結果的には自らが講師となって講演もした。「定年後を輝いて生きる」とのタイトルだった。

早稲田の稲門会ではカラオケとゴルフに参加し、お付き合いの幅も広がってきている。2007年秋の総会では、面白い話をということで、代表講演をした。講演のタイトルは「飛行機に乗ったドン・キホーテの世界漫遊」。出席者の中には、来賓で昭島市の北川市長（慶応大学卒業で「三田会」に所属している）もいたのには恐縮したものだった。

そのほか、レインボーテニスクラブも、男の料理教室「食楽会」も、健康管理と実利(クッキング)で楽しい友好の輪も広がっている。

妻に、関係の人々に心から感謝

こうしてみると、体調を崩してからちょうど7年半、大きく変毒為薬をし、道を開いてこられたことに改めて感動、ご本尊に、関係の人々に心から感謝したい。特に、妻にはどん底時に筆舌に尽くせない心配をさせ苦労をかけた。あれほど苦しんだ自分が再び立ち上がった陰には、妻の不断の祈りと支えがあったからだ。その感謝の思いを立川での公開選句の俳句に詠んだ。

「落ち葉踏む 生き長らえしも 君の支えと」

入選こそしなかったが、選者の有馬朗人先生（元文部大臣、元東大学長）は、「詠んだ人の気持ちが出ているよい歌です」と褒めてくれた。

5000万遍の唱題で開かれてきた人生

そして、強調すべきは入信以来5000万遍を超える唱題を積み重ねてきたことである。実際、これまでの人生を振り返ってみると、「いざ」という大事なときに、唱題のおかげで道を切り開いてきた連続だった。

入信したのは1961年。母が脳溢血で倒れていたことが動機だったが、まず初信の功德で働きながら早稲田に合格できたこと。そして昼間の学部（第一商学部）のまま夜の授業を受けられたこと。4年間の学費を会社が負担してくれたこと。

卒業にあたり、会社（藤井商会）への恩義から自由な就職活動をできなかったが、向こう（NHK学園）から案内書を送ってきて面接の結果、採用になった。それも社会科や国語では希望者が多く倍率も高く難しかっただろうが、免許保持者が少ない商業科で早稲田商学部卒、また会社での実務経験もあることから採用されたであろうこと。

その後、社会科と英語の免許を取得しておいたのが30年後に生きて、都立高校の国際理解のための社会科教材づくり、英検受験者の指導にも役に立った。また、数多い全国の高校の中で、NHKとのネームバリューが学校としての信頼を生み、教師としての評価ももたらしている。しかも、その中立性とメディアの世界が、その後続く聖教新聞につながっていることである。

NHK学園から聖教新聞に移るときのタイミングも不思議だった。大森から小平の都営住宅に引っ越そうと準備をしていた当日に聖教の先輩から電話があったからである。1日遅れていればその後の人生がどうなっていたかわからない。

聖教で海外関係の記事を担当させてもらえたこと。英語が完璧でなかったが故に結果的にスペイン語もできるようになったこと。大勢の聖教記者の中でたった 10 数人の特派員の 1 人に選ばれたこと。特派員としての 10 年間に 32 カ国も訪れることができたこと。この間にパナマ日本人学校の校歌の公募があり、自分の作詞が採用され名前を残したこと。

帰国後、聖教編集局で再び海外関係の記事を担当、外国語から離れずにすんだこと。10 年間近くサンタメリカの支部長として英語実践の場を与えられたこと、またそこでセントラル・テキサス・カレッジで学べたこと。

マラガ大学留学と本の出版にお金がかかったが、「定年後の自分に投資」との初期の思い通り、それがいろんところで芽を吹き、広がりを見せつつあること。

現在の昭島つつじが丘団地の家にしても同じだった。バブルで住宅が高騰しつつあるなか、なんとかしなくてはと、3 日間ほど 1 万遍の唱題に挑戦しているなか、国分寺の借家に公団募集のチラシが入り、5 倍の抽選のなか当たった。その後、団地周辺は開発が進み住環境が素晴らしく充実しつつある。ここを選んだことに心から満足している。これらすべての源泉が題目の積み重ねのお陰だったと思っている。

入信以来の個人折伏は 5 世帯。兄と妹、早稲田の同期生 Y 君、パナマの A 君、NOVA の先生だったカナダ人教師等。入信しても周囲の状況がらその後の信仰実践が難しいケースのメンバーもいるが、仏法と自分に縁のあった人が幸せな人生を歩んで行ってほしいと心から願い祈っているところだ。

そして我が家の 3 人の子供たちも結婚し一人ずつの孫がいる（この 5 月に一人増えた）。それぞれ課題はあってもともあれ健康で生活をできている。本当にありがたいことである。あとは、この報恩感謝のため最大限に広布の伸展と社会に貢献、また子供たちの拠りどころとなっていきたいと思っている。

これからの人生——90 歳で PPK、100 歳で NPO、生涯にわたり仕事を続ける

まず、90 歳で PPK（ピンピンコロリ）を目指す。これは郷里の長野県（男性は日本で最長寿県）でよく言われている言葉だが、90 歳まで元気でピンピンしていて、病気で長く患うことなくコロリと死ぬ、という意味である。背景は、父が 88 歳で元気に素晴らしい米寿を迎え、その後も 91 歳で亡くなる 2 ヶ月前まで野良に出て働いていた。まさに PPK の見本だったような父に倣（なら）いたいこと。

さらに 100 歳で今なお海外での講演活動もしている、しいのみ学園の理事長・鼻地三郎氏の言うように、100 歳で NPO（長生きし、ぼっくりと、往生する）も考えられる。

65 歳あるいは 70 歳まで現役または嘱託として、それまでと同じ職場に残っていられることは素晴らしいだろう。でも、限りある人生を考えたとき、仮に現役の人より収入が少なくなったとしても、60 歳から自分のやりたいことに打ち込んでいくことも素晴らしいことだと思う。NHK 学園に嘱託としてまだ残ることができた K 氏が言っていた。

「確かに、仕事は今までの延長で特に緊張することもないし、収入も安定しているだろう。

でも、果たしてこのまま働き続けるだけでよいのだろうか？残された短い人生の間にもっとやらなければいけない大事なことがあるのではないか、と思うようになった」

彼は人のうらやむような囑託のオファーを断り、若いときにやっていた大好きな高校野球の母校の監督の道を選んだ。これも考えさせられる事例である。

自分の場合は、現役時代とは違った世界で、時間的なゆとりを持ちながら、生涯にわたって仕事を続けるつもりだ。シルバー人材センターで自転車管理の仕事からその後、適当な仕事を探し体力の続く限り。また同センターでは、4年前から理事また広報部会長として、会報「いずみ」の編集に携わることになった。全国に1300あまりあるシルバー人材センターで、会報の編集長が日本ペンクラブの会員というケースはないだろう。ならば誌面は全国でも最高のものに、くらいの気概をもちたい。より面白い紙面の作成のために聖教新聞のデスク時代の経験が生きている。

S G Iの仕事は可能な限りの年齢まで。さらにNPO法人TMC（たちかわ多文化共生センター）の在日外国人支援のボランティア活動や目の不自由な方へのテープ機関誌「ザ・ボイスメール」への寄稿。報酬、無報酬を合わせた講演活動。各紙誌への原稿書き。これらの講演や原稿はHPでも紹介。さらに「気まま随想」などを通して、自分の思いや訴えたいことも発信していきたい。

この70歳代からは、前述の仕事の続けながら、借用の家庭菜園で、子供時代の実家での農業経験を生かしてよい野菜も作りたい。学会の中では壮年部の「太陽会」として輝いていくこと。80歳代も同じ勢いで頑張っていく。そして、2030年の創価学会創立100周年までに最大限の貢献をしてお祝いしたい。さらに90歳代は、今100歳で現役のドクター・聖路加国際病院の理事長として社会活動も続けている日野原重明氏のように“あるがままに行く”でありたい。

「名作の舞台を訪ねて」をライフワークに

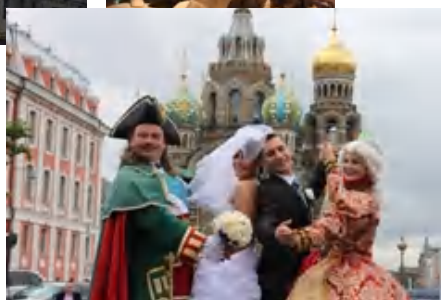
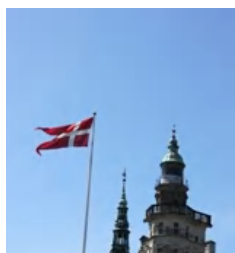
一方、6年前『ドン・キホーテ』から始めた世界文学紀行「名作の舞台を訪ねて」は、定年後の自分のライフワークになりつつある。紀行文は信濃毎日新聞に5回の連載となり自信もついた。しかもそれはセルバンテスが生まれたスペインの市の新聞にもスペイン語で掲載され波動が広がっている。



このライフワークは、語学と編集経験のすべてを最も効果的に生かしていける道だと思う。65歳になった2006年には『風と共に去りぬ』の舞台アトランタとニューオーリンズを訪ねた。07年には10年ぶりにパナマを訪ね、08年には出版100周年となる『赤毛のア

ン』の舞台・カナダのプリンス・エドワード島を訪問した。

09年の2月には、思いがけずもエジプトにいる娘夫婦の招待で妻とナイル紀行やピラミッド訪問もすることができた。その秋には『ロミオとジュリエット』や『ベニスの商人』のイタリアを訪問。昨年は『ハムレット』の舞台デンマーク、それからゲーテの『ファースト』『若きヴェルテルの悩み』やヘッセの『車輪の下』のドイツ、また両国でアンデルセンとグリム兄弟のゆかりの地を訪ねてきた。そして本年6月には、トルストイの『戦争と平和』、ドストエフスキーの『罪と罰』のロシアまで足を伸ばした。



このあと、明年はユゴーの『レ・ミゼラブル』、デュマの『三銃士』のフランス、それに『三国志』の中国と——これも舞台があまりにも広大なので、とりあえずは高校時代に学んだ漢詩「赤壁の賦」の舞台に絞ろう——。

さらに、アメリカ＝「最後の葉」「賢者の贈り物」、メキシコ＝「ベサメムーチョ」の歌の舞台、キューバ＝「老人と海」、スペイン＝「カルメン」「武器よさらば」、アジアに戻りミャンマー＝「ビルマの豎琴」、そして「法華経」の舞台インド……等々。

できればこれらを体力のある喜寿（77歳）までに回り、その集大成として「私の世界名作の旅」を出版したい。

その後は国内で温泉を舞台にした作品の地を訪ねたい。例えば「坊っちゃん」「雪国」「伊豆の踊子」「城崎にて」「夜明け前」そして最後は「奥の細道」の片鱗だけでも……。

どれも青春時代に胸をときめかせた、またその後の人生の精神性を深めたり心を潤してくれた作品である。

理想は取材費のすべてを原稿料でカバーできることだが、少なくともその何割かをカバーできれば上出来だと思っている。足りない部分は一生懸命に働いてそのお金を充てていくことにして。

ということで未来もやることがいっぱい洋々と広がっている。人生のどん底から変毒

為薬できたことに心から感謝、健康に留意し、働き、楽しみながら、他の人のためにも、社会のためにも最大限の貢献をしていきたい、と思っている。

(この部分、2007年5月の「気まま随想」：「定年後は **Having** よりも **Being**」、2009年4月の「気まま随想」：「68歳の心意気」、2011年3月の「気まま随想」：「古希から描く壮大な夢」でも詳しく述べています)

おわりに

以上、ミニ自分史に信仰体験を合わせながらまとめてみました。自分史なので自己に都合のよいような解釈、自分よがりの見方、他人様からは自慢に思えるような点多々あるかと思えます。その点は「自分史」に免じてお許しいただきたいと思えます。この体験が皆様の何らかの参考となり、さらには勇気をお贈りできるものになれば喜びこの上ありません。